

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34534

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592786

研究課題名（和文） 外回り看護師の患者の手術侵襲が最小限になるための先見性に基づいた行動モデルの開発

研究課題名（英文） The development of circulating nurses' actions model based on their forethought toward their surgical patients

研究代表者

小西 美和子 (MIWAKO KONISHI)

近大姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：60295756

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、外回り看護師が、担当する手術患者に対して手術開始前から手術終了直後までの間に手術侵襲を最小限にするために行っている、先見性に基づく行動がどのようなものかを明らかにすることである。研究協力者は、手術室看護の経験が5年以上で、日本手術看護学会の臨床実践能力の習熟度段階でレベルⅢ（熟達者）、レベルⅣ（エキスパート）に該当する者、および日本看護協会で手術看護認定看護師として認定される者とした。研究方法は、参加観察によるデータ収集は、外回り看護師が担当する患者の手術開始から終了まで「完全なる観察者」の立場で行った。その結果、手術開始前から手術終了までの間に、外回り看護師が手術患者に対する先見性に基づく行動の構造を検討した結果、抽出された86個の1次コードから、25個のサブカテゴリー、9個のカテゴリー、【生活を見通す】、【生命の歯車を回す】、【医療者を快調にする】の3個のコアカテゴリーで構成された。これら3つのコアカテゴリーが手術開始から手術終了まで関連し合って存在していることが明らかとなった。この研究の成果は、これまであまりクローズアップされなかった手術室看護師の行動の意味がより明確になったことである。手術室看護師は、患者の生命を守るだけでなく、その生命の守り方が重要であった。さらに手術室看護師は、患者の生活を見通し手術後に患者が元の生活にすぐに戻ることができるよう行動していた。これらの行動が明確になったことは、手術看護において意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to clarify circulating nurses' actions toward their patients, based on forethought, actions that are taken from start to end of an operation in order to minimize surgical invasion. The study design was the theoretical structuring of data obtained through participant observation, as well as semi-structured interviews based on grounded theory and the theoretical premise of symbolic interactionism. The study was conducted at three institutions that varied in establishing entity and scale. The participants comprised operative nurses with 5 years or more experience, scoring Level III (skilled) or Level IV (expert) on the Japan Operative Nursing Academy's Proficiency Levels of Clinical Practice, in addition to being certified perioperative nurses of the Japanese Nursing Association. After studying the structure of the circulating nurses' actions based on forethought toward their surgical patients, from the start to end of surgery, 86 codes were extracted and grouped into 25 subcategories, 9 categories and 3 core categories, [foreseeing daily life of patient], [putting patient's life in motion] and [facilitating work of medical team]. It was revealed that these 3 core categories were present and related to each other throughout the operation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
22年度	700,000	210,000	910,000
23年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学・看護学

科研費の分科・細目：臨床看護学

キーワード：手術看護・外回り看護師・先見性・エキスパートナース

1. 研究開始当初の背景

(1) 手術室看護を取り巻く状況

手術を受ける患者は、麻酔により生体の恒常性をコントロールされた状態であり、メスを入れ侵襲が加わり続けもつとも急激な変化を起しやすく、周手術期のなかでももつとも生命力が弱い状態にある¹⁾。そのため術中の医療・看護の目標は、患者の手術侵襲をできるだけ最小限にし、術後早期からの回復を促すことである。とくに術前期の短縮、在院日数の短縮、また日帰り手術の適応が拡大されるなど周手術期を取り巻く状況が大きく変化しているなか、手術室看護師の役割はこれまで以上に重要となっている²⁾。しかし現状では、手術看護は、医師の介助として機械的に提供されているように見受けられ、手術室看護師の看護実践そのものが評価されにくい状況が長年指摘されてきた。その一因として手術室という特殊な環境で、しかも閉鎖された空間で行われているが故に、看護師一人ひとりの看護実践は暗黙知として埋もれていることが多かったことも挙げられる。2003年に日本看護協会において手術看護領域が認定分野として特定されて以降³⁾、手術看護に携わる看護師の専門性がようやく着目されはじめてきた段階であり、看護師が行っている実践知をより具体的に目に見える形として記述し、それらを継承していくことは手術看護の質の向上にとって不可欠であると考える。

(2) 手術室看護に関する研究の動向及び位置づけ

手術室看護師の役割は、器械出しと外回りの2つに大別される。とくに外回り看護師は、手術チームの要であり、患者の看護、他職種との連携、手術進行がスムーズに行う上で手術全体のマネジメントを行うなど、その役割は大きい。米国では外回り看護師は非常に高いポジションにある⁴⁾。そのような役割を担

い、患者の手術侵襲を最小限に導き手術後順調に回復したとしても、当たり前とされてしまい、術中に手術室看護師が行っている実践そのものが手術室看護の専門性としてその意義や価値が明確に述べられることはない。その後、手術室看護の専門性をとりあげ研究という形で解明し始めたのが佐藤の研究⁵⁾以降である。2003年手術看護が認定看護師の領域認定を受け、少しずつ研究数は増えてきているが、その研究の多くは手術室看護の内容や行為の特徴を列挙するにとどまっており、それらを具体的に教育や実践に取り入れることは難しい状況である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、外回り看護師が患者の手術侵襲を最小限にするために先見性に基づいた行動を明らかにし、主要なカテゴリーを抽出し構造化を行うことである。

この研究の独創的な点は、これまであまり明確にされていなかった手術室看護師の実践知を解明することである。看護師のなかに埋もれていた暗黙知を実践知に変換することは、それらを継承していくための教育プログラムの開発につながり、さらに新人、中堅看護師を対象とした手術看護実践のための教育ツールの開発、実践能力の向上へとつながる。手術室看護の専門性をさらに明確にすることができ、看護の質の向上へ結びつけることができる。

3. 研究の方法

手術患者の手術侵襲を最小限にする先見性に基づいた行動モデルの中核となる構成要素の再検討を行った。

1) 調査方法

手術室看護師を対象とした追調査

10～15例程度の質的調査（手術開始から手術終了まで手術室に滞在し、外回り看護師

の行動を参加観察する。および調査後半構成的質問紙による調査の実施を行う。調査内容は、受け持ち患者に対して手術侵襲が最小限になるために行っている先見性とは何かについて、明らかにする。

2) 先見性に基ついた行動の構造化

グラウンデッドセオリーによる分析をもとに、先見性に基ついた行動について構造化を行う。

3) 倫理的配慮

本研究は、兵庫県立大学看護学部地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認の後に行つた。

4. 研究成果

1) 研究協力者の属性

研究協力者は、調査への同意の得られた17名で看護師経験年数は5~29年、手術室経験年数は5~27年、平均年数13.4年であった。

2) 抽出されたカテゴリー

手術開始前から手術終了までの間に、外回り看護師が手術患者に対する先見性に基つく行動の構造を検討した結果、抽出された86個の1次コードから、25個のサブカテゴリー、9個のカテゴリー、【生活を見通す】、【生命の歯車を回す】、【医療者を快調にする】の3個のコアカテゴリーで構成された。これら3つのコアカテゴリーが手術開始から手術終了まで関連し合つて存在していることが明らかとなった。

(1) コアカテゴリー【生活を見通す】

患者を手術室に迎えて、手術が始まるまで、手術が始まり手術の山場を迎え、手術を終えるまでの間に起こる出来事や手術経過の中で、外回り看護師の行動を検討した結果、『先手を打つ』、『手術の山場を見極める』、『守り抜いた生命を繋ぐ』の主要なカテゴリーが抽出された。そのカテゴリーの関連を検討した結果、外回り看護師は、『先手を打つ』から『手術の山場を見極める』、そして『守り抜いた生命を繋ぐ』ことへと【生活を見通す】プロセスを辿りながら、先見性に基ついた行動をとっていることが明らかになった。コアカテゴリー【生活を見通す】の構造を図1に示す。

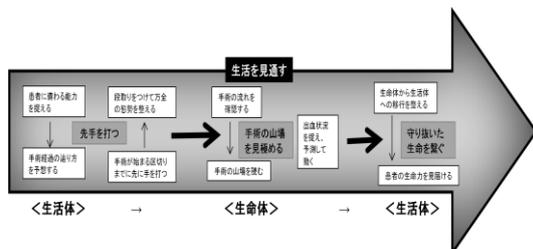


図1 【生活を見通す】行動の構造

外回り看護師が患者の【生活を見通す】行動とは、手術開始前から手術終了後の時間軸のなかで、＜手術室に入室する前から患者に覆布がかかるまで＞の局面、＜手術が開始され、患者の身体にメスが入り、生命がもっとも危機的状態に陥る＞局面、＜麻酔から覚醒し、元の状態に戻っていく＞局面、これら3つの局面を捉え、＜生活体＞から＜生命体＞、＜生命体＞から＜生活体＞への移行をスムーズにしていくために『先手を打つ』、『手術の山場を見極める』、『守り抜いた生命を繋ぐ』。その方向性は生活体としての患者の生活を見通すことである。

(2) コアカテゴリー【生命の歯車を回す】

患者を手術室に迎え、手術が始まり手術中の出来事や手術経過の中で、外回り看護師の行動を検討した結果、『患者に成り代わる』、『患者の生命の安全を守る』、『患者の生命力を見極める』の3つのカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリーの関連を検討した結果、外回り看護師は手術開始から終了まで、痛みや苦痛を訴えることができない患者に対して『患者に成り代わる』こと、手術中自らの五感を駆使し、通常との差異を捉えたり、アンテナを張って生命徴候の変化を捉え、『患者の生命力を見極める』こと、と同時に患者の体温を見張る、患者の皮膚を護り『患者の生命の安全を守り抜く』ことを通して、患者の【生命の歯車を回す】行動をとっていることが明らかになった。

コアカテゴリー【生命の歯車を回す】の構造を図2に示す。

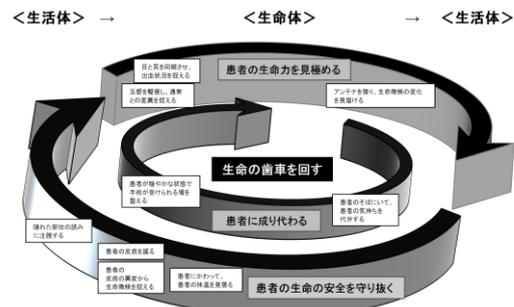


図2 【生命の歯車を回す】行動の構造

外回り看護師が患者の【生命の歯車を回す】行動とは、患者の不安や苦痛をわかり、患者にどれだけ寄り添えるか『患者に成り代わる』内側の層と、『患者の生命の安全を守り抜く』、『患者の生命力を見極める』外側の層を連動させ、目に見えるものと見えないものを捉え、患者を焦点化して見ることと俯瞰的に見ること、これらの見方を連動して患者の生命力を捉え、患者の生命の歯車を回す方法とその

加減を見極め、患者の生命に力を与えることである。

(3) コアカテゴリ 【医療者を快調にする】

外回り看護師が患者を手術室に迎える段階から手術を終えるまでの手術室で起こる出来事や他職種との関わりにおいて、外回り看護師の行動を検討した結果、『医療者の間をつなぐ』、『術者の呼吸に合わせる』、『手術に対して構えてかかる』カテゴリが抽出された。それらのカテゴリの関連を検討した結果、外回り看護師は、『医療者の間をつなぐ』、『手術に対して構えてかかる』から『術者の呼吸に合わせる』ことへつながり、【医療者を快調にする】行動をとっていることが明らかになった。図3に構造を示す。

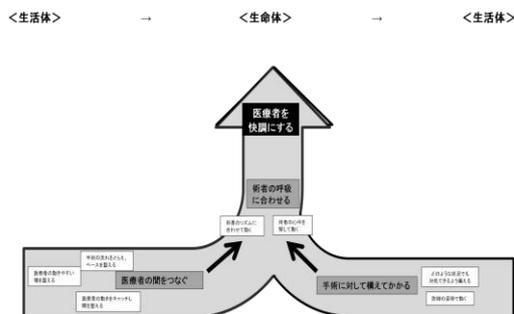


図3 【医療者を快調にする】行動の構造

外回り看護師が【医療者を快調にする】行動とは、手術の山場で術者の呼吸に合わせて動くことである。そのため、手術がスムーズに流れるように場や間を整え、どのような状況になっても医療者の動きにすぐに応じられるように構えてかかることである。これらの行動がうまく機能することは、手術が円滑に進行し、手術侵襲が最小限となり、患者の回復を促進することへとつながる。

(4) 先見性に基づいた行動の定義

本研究によって、外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づいた行動の定義は、「患者が手術室に入室した時点から常に患者の生活を見通し、自らの五感と皮膚を介して患者の生命の歯車を回し、手術の山場で術者の呼吸に合わせて動くことである」。

(5) 研究の成果と今後の方向性

この研究の成果は、これまであまりクローズアップされなかった手術室看護師の行動の意味がより明確になったことである。手術室看護師は、患者の生命を守ることだけでなく、その生命の守り方が重要であった。さらに手術室看護師は、患者の生活を見通し手術

後に患者が元の生活にすぐに戻るができるよう行動していた。これらの行動が明確になったことは、手術看護において意義があると言える。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

1) 小西美和子: 看護の原点としての手術看護、第34回日本手術看護学会、兵庫県地区大会、2011

2) 藤本雅子、後藤ちえみ、小西美和子: 周手術期における病棟-手術室間の連携に関する検討-病棟看護師が手術室看護師に求める期待-、日本手術看護学会5(2)、P.201

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小西美和子 (MIWAKO KONISHI)
近大姫路大学・看護学部・教授
研究者番号: 60295756